

平成22年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520525

研究課題名（和文） 自ら学ぶ姿勢を育てる小学校英語活動のための授業モデル構築

研究課題名（英文） Development of a Teaching Model for Primary School English Activities to Enhance Self-directed Learning Ability.

研究代表者

大和 隆介（YAMATO RYUSUKE）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：60298370

研究成果の概要（和文）：

本研究により次の知見が得られた。

1. 学習ストラテジー指導を取り入れた小学校英語活動は、学習意欲を維持しながら学習ストラテジーの使用を促進させる可能性が高い。
2. 教材等の創意・工夫により学習ストラテジー指導を取り入れた英語活動の実践は充分可能である。加えて実際に授業を行う際には以下の点が重要であることも示された。
 1. メタ認知ストラテジーを重視して指導する。
 2. 学習ストラテジーを実際に使わせながら指導する。
 3. 英語だけでなく適宜日本語を用いて指導する。

研究成果の概要（英文）：

The following findings were obtained by this research.

1. Elementary School English activities incorporating Learning Strategies Instruction may well enhance students' positive strategies use while maintaining their motivation to learn.
2. Developing user-friendly teaching materials will make the implementation of English activities quite highly plausible.

The following points were also found important in the real classroom practice.

1. To focus on meta-cognitive strategies.
2. To let students learn strategies by using them.
3. To adequately use Japanese as well as English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語活動、学習ストラテジー、自律学習

1. 研究開始当初の背景

小学校における「英語活動」の取り組みは、文科省指定の研究開発校による先導的実践研究が核であった10年間の第1ステージを経て、現学習指導要領の実施(2002年)以降は、大部分の公立小学校で英語活動が「総合的な学習の時間」の枠で実施される第2ステージにあると言われる(松川, 2004)。今後、この第2ステージが、英語が「教科」となる第3ステージへと向かうのか、それとも現在の枠組みの中に留まるのか、その議論に未だ決着はついていない。しかし、どちらの方向に進むとしても、「児童が自ら学ぶ姿勢を育てる指導方法の確立」は、学習活動の質を高める上で必要不可欠の研究課題だと言えよう。

この自律学習能力を育てる方策として、言語教育において学習ストラテジー指導が大きな注目を集めている(O'Malley & Chamot, 1990; Macaro, 2002; JACET 学習ストラテジー研究会, 2004, 2005)。海外では、幼稚園から大学に至るまで多様な学習者に対して、学習ストラテジーが指導され効果を上げている(e.g. Oxford, 1997; Chamot et al, 1999)。

一方、日本においても近年、学習ストラテジーを扱った研究は数多く行われてきたが、小学校の英語活動を対象とした本格的な研究はこれまで報告されていない。

小学校の英語活動において、学習ストラテジーを指導した場合、児童の英語学習に対する興味・関心、自ら学ぶ姿勢、彼らが実際に発話する英語の質や量にどのような変化が生じるのだろうか。こうした新たな研究の視点は、今後、日本の教育全体の中でもその重要性が増すだろう小学校での言語教育に対して、貴重な基礎的データを提供するであろう。しかしながら、個人レベルの研究では、必要となるデータを収集し、中・長期的な実践指導を行い、その効果を検証することは極めて困難である。そこで、これまで学習ストラテジー指導を取り入れた英語教育の実証的研究を幅広く行ってきた研究者5名がチームを結成し、「自ら学ぶ姿勢を育てる小学校英語活動のための授業モデル構築」という課題を掲げ研究を遂行することにした。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、小学校の英語活動において、学習ストラテジー指導を体系的に取り入れた言語指導が、児童の学習活動に対する動機づけ、自律学習能力、コミュニケーション能力にどのような変化をもたらすか

を検証することである。この目標を達成するために、研究組織を構成する研究者5名が、協力・分担し、以下の研究を3年間にわたって順次遂行した。

- ①英語活動における児童の学習ストラテジー使用の実態調査
- ②小学生用に工夫したストラテジー指導を取り入れた英語の授業実践と効果の検証
- ③実態調査・授業実践の結果分析に基づいた小学校高学年用の授業モデルの構築

3. 研究の方法

【平成19年度 研究計画・方法】

平成19年度は、主として(1)小学校英語活動における学習ストラテジーの実態調査、(2)パイロット授業実践と効果の検証を行った。

(1)小学校英語活動における学習ストラテジーの使用実態調査に関しては、小学生が英語活動の中で実際にどのような学習ストラテジーを使用しているのか、また学習ストラテジーに対してどのような知識・認識を持っているのかを調査した。(2)パイロット授業の実践と効果の検証に関しては、次年度からの本指導に向け、本研究の参加者全員が交代で実際に英語活動を指導することにより、研究参加者の共通理解を深めると同時に、指導方法に付随する問題点を整理した。

【平成20年度研究計画・方法】

平成20年度は、前年度に遂行した調査、パイロット授業実践で得られた知見を基に、(1)授業モデルの構築、(2)授業モデルの実践指導を行った。

(1)の授業モデルの構築に関しては、学習指導がその効果を上げるためには、安易な経験主義に陥ることなく、信頼に足る理論的枠組みに沿って指導することが重要である。このような意味合いから、本研究は、学習ストラテジー研究(e.g. Wenden, 1987; O'Malley and Chamot, 1990; Cohen, 1998)、自律学習研究(e.g. Holec, 1981; Benson, 2001)、認知学習理論(e.g. MacLaulin, 1987; Andersen, 1994, Skehan, 1998)及び小学生の実態を考慮し、次の指導理念に添って指導を行った。

- ① メタ認知を重視して学習ストラテジーを指導する。
- ② タスクと組み合わせ体験を通して学習ストラテジーを指導する。
- ③ できるだけ明示的かつ段階的に学習ストラテジーを指導する。
- ④ 英語だけでなく、適宜日本語を用いて指導する。

(2)の授業モデルの実践指導については

パイロット授業実践の結果をふまえて構築した授業モデルを実践し、新たな問題点を整理しさらなる改良を目指した。

【平成21年度研究計画・方法】

研究最終年度となる平成12年は、主として小中が連携したストラテジー指導を取り入れた英語活動のシラバス作成及び教材の開発・整備を行った。

4. 研究成果

平成19年度は、(1)パイロット授業実践と効果の検証、(2)小学校英語活動における学習ストラテジーの実態調査を行い、これらの実践・調査から得られた知見を土台とし、平成20年度の本研究に向けて、学習ストラテジー指導を取り入れた英語活動における指導方法の精微化を図った。これらの研究により得られた成果は、学会発表(1件)及び論文(1編)として発表した。

平成20年度は、平成19年度の基礎研究を土台として、これまでの小学校で実施した授業実践の内容とその指導効果を(1)児童の英語活動に対する動機づけや学習ストラテジーの使用認識から分析し、更に(2)実践授業の内容を新たに開発したSOLT (Strategy Orientation of Language Teaching)を用いて分析した。この分析から次の3つの知見を得ることができた。

①学習ストラテジー指導を英語活動に取り入れることにより、学習意欲を維持しながら学習ストラテジーの使用を促す肯定的な影響を与える可能性が存在する、②パイロット授業は、通常の授業とは学習ストラテジー指導の観点から質的にも量的にも明確に異なる、③学習ストラテジー指導を通常の小学校英語活動に取り入れることは教材や指導法を工夫することにより十分可能である。

以上の研究実績は、学会発表(2件)や論文(1編)により発表した。

最終年度となる平成21年度は、平成19年度及び20年度の研究成果を土台として、具体的な指導法の精微化に努めると同時に、日本の小学校とベトナムの小学校における英語学習において学習ストラテジー指導の量的質的違いにおいての比較検証もを行い、これらの結果を、学会発表2件、論文1編で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① Yamato Ryusuke, Kimura Takashi, Carreira-Matsuzaki Junko, Tsuda Hiromi, Hiromori Tomohito. 「Pilot Lessons Integrating Learning Strategy

Instruction into English Activities at Primary Schools.」*Annual Review of English Language Education*, 20, 231-240, 2009. (査読有)

- ② 津田ひろみ、木村隆、カレイラ松崎順子、大和隆介. 「自ら学ぶ姿勢を育てる工夫を取り入れた小学校英語活動」『中部地区英語教育学会紀要』第38号, 181-188頁, 2009年. (査読有)
- ③ 大和隆介、津田ひろみ、林靖子、カレイラ松崎順子、木村隆. 「自ら学ぶ工夫を取り入れた小学校英語活動のためのパイロット授業」『JACET 中部支部 25周年記念論文集』167-178頁, 2008年. (査読有)

〔学会発表〕(計5件)

- ① Yamato Ryusuke, Kimura Takashi, Hiromori Tomohito, Carreira-Matsuzaki Junko, Tsuda Hiromi. “The Strategy Orientation of Language Teaching (SOLT): Development of an observation instrument for Strategy -Supported Language Instruction.” Asian Conference on Education, 2009, Oct. 24, 2009, Osaka, Japan
- ② 木村 隆、大和隆介、津田ひろみ、カレイラ松崎順子. 「ベトナムと日本の小学校英語授業を比較する質問紙調査と授業分析を通して」第35回全国英語教育学会、平成21年8月8日、於：鳥取大学
- ③ 大和隆介、木村隆、津田ひろみ、カレイラ松崎順子、廣森友人. 「小学校英語活動における学習ストラテジー指導を取り入れた授業実践の成果と課題」、第34回全国英語教育学会、平成20年8月9日(土) 於：昭和女子大学
- ④ 大和隆介、津田ひろみ、木村隆、カレイラ松崎順子、廣森友人. 「自ら学ぶ姿勢を育てる工夫を取り入れた小学校英語活動：公立小学校2校での質問紙調査と授業実践の結果から」第38回中部英語教育学会、平成20年6月29日、於：清泉女学院大学
- ⑤ 大和隆介、津田ひろみ、林靖子、カレイラ松崎順子、木村隆. 「自ら学ぶ工夫を取り入れた小学校英語活動のためのパイロット授業」、第7回小学校英語教育学会、平成19年8月18日、於：鳴門教育大学

〔その他〕(計1件)

- ① 『平成19年～21年度科学研究補助金(基盤研究(C))研究成果報告書：自ら学ぶ姿勢を育てる小学校英語活動のための授業モデル構築』全62頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大和 隆介 (YAMATO RYUSUKE)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：60298370

(2)研究分担者

尾関 直子 (OZEKI NAOKO)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：00259318

(H19)

木村 隆 (KIMURA TAKASHI)
椙山女学園大学・文化情報学部・教授
研究者番号：30204978

カレイラ松崎 順子 (CARREIRA -MATSUZAKI
JYUNKO)

東京未来大学・こども心理学部・准教授
研究者番号：40454186

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)

立命館大学・経営学部・准教授

研究者番号：30448378

津田 ひろみ (TSUDA HIROMI)

明治大学・国際日本学部・非常勤講師

研究者番号：70449974

(H19→H20：研究協力者)

(3)連携研究者

(4)研究協力者